

(熊毛郡中種子町大字坂井字立切)

位置と環境

遺跡は町の中心部から南へ約 6 km離れた、長野崎と呼ばれる台地の東側の裾野に広がる標高約120m前後の平地に立地している。周辺には、京塚遺跡や今平・清水遺跡・土佐遺跡といった縄文時代の遺跡も立地している。

調査の経緯

県営畑地帯農道網整備事業に伴い、中種子町教育委員会が調査主体となって、平成 8 年度に確認調査、平成 9 年度に本調査を実施した。その結果、後期旧石器時代初頭の遺物・遺構が出土した。

遺跡の取扱いについては、重要性和遺跡の保存活用を図るため、国・県の補助を受け中種子町教育委員会が調査主体となり、県教育委員会の協力を得て、平成10年から12年にかけて重要遺跡確認調査を実施した。

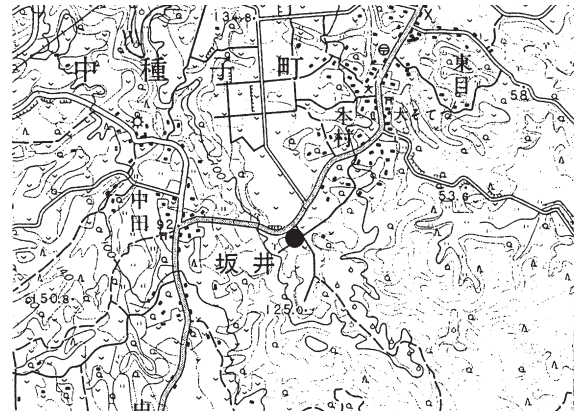
遺構と遺物

平成9年度の本調査では、アカホヤ火山灰層の下から縄文時代早期の遺物が出土した。その下の黒褐色土からは、旧石器時代の終末期にあたる細石器の加工場と考えられる遺物が出土した。さらに、その下部より種子島独自で確認される火山灰層の四番目ということで種IVと呼ばれる約30,000年前の鬼界カルデラの噴出物の下から後期旧石器時代初頭の遺物・遺構が出土した。

縄文時代早期では、吉田式土器や塞ノ神式土器と磨石・叩石といった石器が出土した。

細石刃文化期としては、加工品である細石刃と母石である石核と加工時にでた剥片・破片といった遺物が狭い範囲に集中して出土した。

後期旧石器時代初頭では、土坑、焼土、礫群といった遺構と磨石・叩石・台石・砥石・礫器・打製石斧・局部磨製石斧といった遺物が出土した。土坑については 2 基検出した。両方とも直径 1 m前後の円形を呈するもので深さが75cmで周辺に10cm前後のピットを持つものと深さ85cmのものであった。両方の土坑内から磨石等の石器が出土した。礫群は拳大の



第 1 図 立切遺跡の位置

砂礫を中心とした構成で、礫のほとんどが火熱により赤く変色し、熱破碎を受けていた。約80cmの円形を呈するものである。焼土は、調理用なのか暖をとるためのものであったかは議論が分かれるところであるが、ほぼ円形を呈するものが7基、楕円形を呈するものが4基、レモンの断面のような形のものが1基検出した。大きいもので 1 m弱から小さいもので30cmのものまで多岐にわたって見つかった。断面はレンズ状に変色しているものや皿状に変色しているのがあった。この断面の最深部が10cmを越えるものがあったことから同じ場所で数回から数十回にわたり使用された可能性が高いとされ、一定期間定着していたと考えられるという評価につながった。

平成10年度から実施した重要遺跡確認調査では、縄文時代前期の土器片や縄文時代早期の遺物が出土した。細石刃文化期においては、剥片や破片が出土した。後期旧石器時代初頭では、遺物・遺構が出土した。

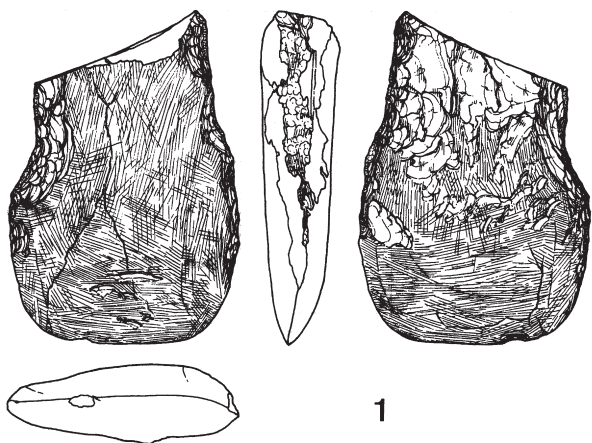
縄文時代前期については、土器片が小片であるため型式不明である。縄文時代早期では、塞ノ神式土器と吉田式土器が出土した。

細石刃文化期においては、遺物が数点の出土であったため、平成 9 年度調査を補強するには至らなかった。

後期旧石器時代の初頭では、遺物・遺構の情報は増えたが、調査の目的が保存目的の範囲確認であったため遺構の詳細までは調査しなかった。

特徴

本遺跡において特筆すべきことは、後期旧石器時



代初頭の文化層である。この時期は、南種子町の横峯C遺跡についての発見で、剥片石器が少なく、局部磨製石斧（第2図1）を除いて磨石・叩石（第2図2・3）といった縄文時代的な石器が多いといったことなどが特徴としてあげられている。しかしながら、石器加工場と考えられるブロックも確認され、遺構との関連も含め今後の検討課題は多い。

また、種子島で初めて発掘調査により細石刃文化期の遺物が見つかった。これは、細石刃核が船野型で宮崎県・大分県といった東九州に広く分布するもので、この時期の種子島での交流を知る上で重要な資料ではないかと思われる。

資料の所在

出土遺物は、中種子町歴史民俗資料館に収蔵・保管されている。

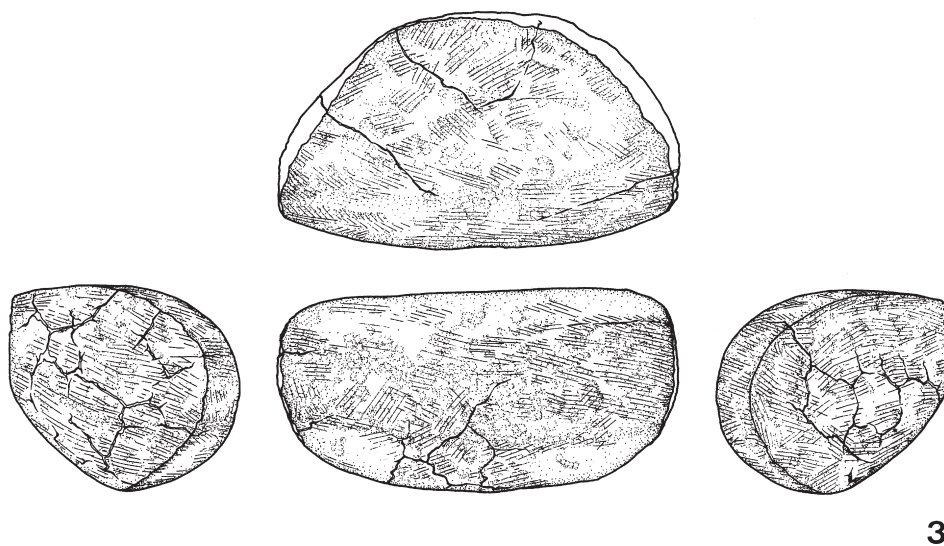
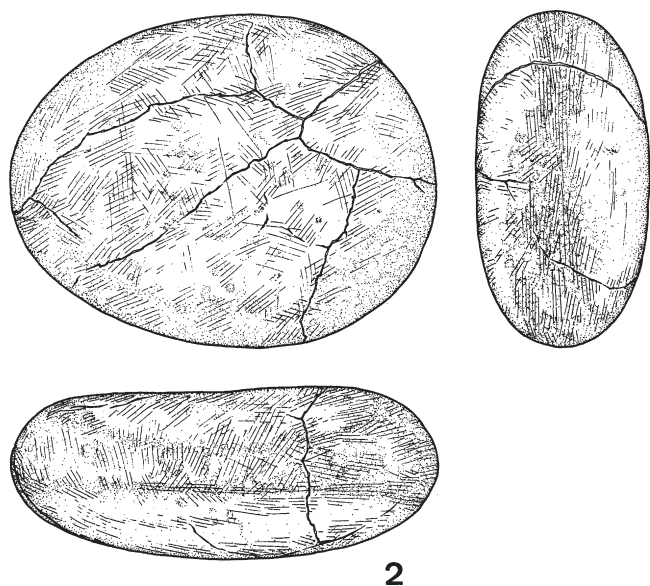
参考文献

中種子町教育委員会1999「立切遺跡・京塚遺跡」『中種子町埋蔵文化財調査報告書』3

中種子町教育委員会2002「立切遺跡」『中種子町埋蔵文化財調査報告書』4

中種子町教育委員会2002「立切遺跡」『県営畑地帯農道網整備事業に伴う事業報告書』

(田平祐一郎)



第2図 立切遺跡出土遺物（縮尺1／2）